

鐵鑛之が中心となり其外圍は方鉛或は閃亞鉛を以て覆はれ更に其上を黃鐵鑛を以て包めり又其黃鐵鑛の外圍に裂隙あるときは必ず其面に菱鐵晶を結ぶを常とせり

又方言に菱鐵を「ガマ」閃亞鉛を「ガラス鉛」白鉛鑛を「ナマリシロコ鑛」方鉛鑛を「鉛鑛或は單に鉛」と稱せり

文苑

重盛祈死

教授 笠間益三

重盛切諫清盛之兇暴而清盛兇暴如故。重盛憂迫遂祈死熊野社。是前史之所載而不疑焉。吾謂重盛祈死之事屬怪誕。蓋齊東野人之語而不足信也。吾觀重盛之爲人純良忠賢當時無可與比者。雖以清盛之暴戾恣睢當其將幽上皇因重盛之言而寢其轡然則清盛之暴戾未至於不可言者以有重盛也。一日無重盛則清盛何所不底當此間區々祈死而求免自視父之暴行使重盛果如此則與匹夫匹婦不能忍一旦之怨憤而自經於溝瀆者亦奚擇焉。孰謂重盛之忠賢而爲之乎。夫苦心焦慮積以致疾亦人之所不免也。重盛以純忠純孝之質立於忠孝難兩全之地其苦慮果如何哉。安知由之而遂致其疾哉。設果使祈死而實有效乎。生亦可祈盛衰亦可祈興亡禍福止凶暴回善良凡有關於人之利害得失者皆無不可祈而求者焉。然則重盛何以不先祈止父之凶暴而遽祈已之死亡也。苟神而有靈亦豈有唯允人之祈死而不聽其祈止兇暴之理乎。吾故曰重盛之祈死是必無之事也。記

此事者始於山槐記。係於藤原忠親之所錄。忠親不明於道理。信浮說而記之耳。後世執史筆者。相因而不疑。使忠孝若重盛者比於匹夫匹婦之所爲。可勝慨哉。

山中花見の記

助教授 黒本 稼堂

時は卯月の十九日ありけり。天遊道人訪ひきて、今より花見にねもひたち給はぬか、とさろはれければ、いづこの花をか、と問ふ。道人は、えみて、いはぬぞ興あるべき、と答へられぬ。いふかしく思ふものから、午の後五時ころに、宿を出づ。

袖はへていつこともあくゆくさきはねほつろあくもゆかしかりけり

とよみ出ければ道人かへし

ゆかしくもあらねときませ世にまらぬ花を尋ねるけふの山ふみ

向山といふを躋れば、いづれのかたも、花ざうりにて、城下乃家は、皆白雲にうづもれぬ。

むかひ山のほりてみまはいくへとも限えられぬ花のまら雲

この比のけしきは、いづれとは、あけれど、人の住める境は、人馬の塵、心にろみぬべく、目に見ゆる者は、僅に、一かこひの花のみあり。さるを、あゝに、くれば、物の音とては、鳥の聲、塵とては、花のちり、外にこの世に似るものもあし。殊に、南の山、西の海、千里の外も、よろあらず。よきはよく、あしきはあしく、みゆるぞかし。とまれ、かくまれ、世の外に、たつべきにこそ、といひつゝ、ゆく。茶店のあるじ、まばし休らひ給へとて、あとに従ひ